

---

# パラサイト

大橋 秀人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

パラサイト

### 【Nコード】

N9008H

### 【作者名】

大橋 秀人

### 【あらすじ】

上京して数年が経っても変わらない友情。それぞれの過去。交錯する思惑。二人の女性の失踪を追う。

## 第一話

1

目が疲れ、窓外を眺めようと武雄は身を擦った。窓が白んで外の様子は窺えない。それでも、冷えた外気に触れようと窓に顔を近づける。店内は喧騒に侵され、耳を敬ても雪の降る音は武雄に届かなかった。

諦めて、Waris heelと窓に指を当てていると、二つのエルを書く前に、逃げるな、と智和に肩を引かれた。

「だから俺あ言っちゃったんだあ」

口からはみ出した海老の尻尾を収めようとして、正也は次の言葉を紡がない。

傍目から見れば冷たい態度で、取り敢えず落ち着けや、と智和は言い、胸を叩く正也のグラスに酒を注ぐよう武雄に顎をしゃくった。

「要するに、後輩がお前の女にちよつかいだしたってことだろ？」  
酒瓶を置いた武雄に眼を剥き、肯きながら指差し、正也は反対の手で口を押さえたが、海老の尻尾は敢え無く口から零れた。「食うのか話すのかどつちかにしろや」

すかさずテーブルに落ちた海老にティッシュをかぶせようとした智和の手を正也は払いのけた。何するんじゃあ、と智和が正也を睨む。「俺あ海老の尻尾まで食わんと気がすまんのじゃ」

そう言つて正也は尻尾を口に放り込んだ。喧騒の中の剣呑な空気に海老の殻が砕かれる音が滑稽に響く。口の中には既に尻尾しかないようだ。睨み続けようとしていた智和だったが、耐え切れずに吹き出した。何もおかしいことはしてねえ。正也は一人だけ不満顔をしていたが、満更でもない気持ちを下手に隠していた。

正也と智和は互いに悪態をつきながら、意見がたがう度に、酒を注

ぐのに徹している武雄にどちらが正しいか判断を仰いだ。が、二人は武雄が答える前にくだらない小競り合いに戻り、怒っているように楽しげで、何処か解放されているようでもあった。武雄は、二人のそんな光景を見守っているのが好きだった。店員が個室の扉を開けると、武雄と智和は黙ったが、正也は高潮した顔を前に突き出しながら話し続けた。武雄が窓に書いた文字がだらしなく崩れてしまったのを確認していると、しっかりした口調で智和が追加の注文をしだした。

店員が出て行き扉が閉められると、暖房の利きすぎた室内に吸い寄せられていた冷たく心地良い外気が閉じ込められ、部屋は急激に暖められた。寒さにはっとしていた武雄はそれを少し残念に思ったが、扉は程なく、再び開けられた。

おお、来たか、と正也が大声を上げ、良太を招きいれた。良太の後を、何処か見覚えのある切れ長な眼と眉が印象的な女性が従ってきた。

「憶えています？ あたしと会ったこと、ありますよね？」

武雄の向かいに坐ることになった女性は、予想に反して落ち着くまもなく武雄に話しかけてきた。コートを脱ぎながら無邪気な笑顔を向けてきた女性の瞳は、カラーコンタクトで左右で違う色をしていた。

その異様さとなれなれしい態度に武雄は少し嫌悪を覚えた。

女性のことを思い出せないでいる武雄に、ひどおい、と女性は大袈裟に眉間に皺を寄せ、隣に坐る良太に顔を向けた。

「あたしのこと、忘れちゃってるみたいだよオ？」

武雄は、きっかり一年に一度、年の暮れから始めに掛けて地元に戻ってきていた。目の前の女性と会ったのは、一年前か、二年前か。確かに見覚えのある顔はしていたのだが、髪型も印象も変わってしまっていて思い出せなかった。

「結婚？」

智和の声に一同注目させられた。

「俺が結婚して、何が悪いことあるか」

武雄に何かを言おうとしていた良太は、姿勢を正していた正也に顔を向け、本気か、とだけ訊ねた。正也は毅然と肯いて見せた。その態度を取った正也が嘘を吐いたことはなかった。

智和は汚い言葉で正也を罵りながらも、その端々に喜びを感じさせていた。どうせガキでもできちまったんだろ、と言ったり、お前はだらしなからちゃんと首輪を付けてくれる奴がいた方が丁度良いんだよ、と言ったりして少しだけ酒の量が増えた。

滅多に見られない智和の醜態を拝もうと、良太と武雄は申し合わせて酒を奨めた。女性は目を輝かせ、良太の背中越しに頻りに正也に馴初めやら何やらを質問していた。

「大体、おまえはもつと早く結婚するはずだったんだ」

酒が利いてきた智和が一段大きな声を上げた。豪快に笑っていた正也が真摯な顔を智和へ向けた。

「女を孕ませただけで結婚を決意するなら、何で幸とは結婚しなかった？」

武雄の期待とは裏腹に、智和は悪酔いしていた。押し上げられたプラスチックフレームの眼鏡の奥にある目が据わっていた。ふざけているのではなかった。正也は何も言わず智和を見据えている。

「あの頃は、若かったしな」

武雄より慌てていた良太が、盛んに肯きながら故意におどけた声を出した。

「じゃあなんで孕ませたままだった。なんで、孕ませたまま逃げたんだ？」

「あの頃、こいつにお腹の子をおろさせる為の金なんて、なかったじゃねえか」

「怖かったんじゃあ。俺あん頃、何もかも投げる癖がついとうた」

そう言うと正也は何かを噛み締めながら微笑んだ。智和は正也を睨

みながら勢いよく立ち上がった。どこに行くんだ、と良太が不安げに声をだした。帰る、とだけ言って智和は扉を開けた。冷たい外気が室内に吸い込まれた。

悪い、言いすぎたわ。胸一杯に息を吸った智和がゆっくりとそれを吐き出しながら、誰にでもない風にそう呟くと同時に扉が閉められた。正也は眉間を厳しく寄せ、口を突き出し、舌を頬の内側に押し付けているようで、そこだけが不自然に膨らんでいた。

智和がいなくなると正也はそのまま口を開かず、手酌酒を黙って啜っていた。昔から智和と正也の喧嘩は一種の決まりごとで、それが本気になることも多かった。そんな時は決まって智和の方がその場から立ち去り、正也が残るといふ構図が出来上がっていたので、良太や武雄はその状況に慣れてはいた。

「そっぴや、まだ思い出せないのかよ？」

良太が努めて明るい口調で武雄に訊いた。良太は暗い場の雰囲気を早く変えたいのであった。女性は武雄の目前までに顔を突き出し、怒った顔や笑った顔、鼻を指で押し上げたりして様々な顔を見せてた。

「ライブに来てくれた人だろ？ 思い出したよ。確か、正也の後輩の彼女じゃなかったっけ？」

正也は反応しなかった。が、あたりい、と言って女性は嬉しそうに武雄の頬を二三度押した。机に乗り出した体から胸の谷間が覗いた。歯噛みされた舌が口の端で鈍く光った。

「でも、もう真治とは別れたの」  
女性は機敏に小首を傾げ、悪びれる様子もなく答えた。武雄は不意に疑問に思った。

「今日二人で来たし、もしかして？」  
そう言っつて良太と女性を交互に指差した。違いますよお、と無邪気に否定された。

店を出ると、雪は既にやんでいた。それでもまだ樹木には積もっていて、女性は固くなったそれを丸めて投げてきたりした。

武雄は酔った正也を送っていた。女性は良太の車に乗っていった。武雄は女性の名前を思い出せないでいた。女性を思い出せたのは、智和と正也の会話で幸のことが出たからであった。幸と正也が、武雄がヴォーカルをしていた陰気なバンドのライブに連れてきた後輩二人のうちの一人だったことまでは思い出せた。それでも名前は思い出せなかった。確か、聞いてもいなかったはずだった。ただ、女性の芯の通った強い眼差しだけが印象に残っていた。武雄は、真っ白なギターを爪弾きながら、女性の瞳を見て歌ったことを思い出したのだった。

「あいつ…亜紀は今、良太の家にいる」

正也は何処か遠い目をしながら言った。武雄は考えを見透かされたようで恥ずかしい気持ちになった。

「付き合っていないんじゃないのか？」

ああ、とだけ呟き、正也は車内の空気を勢いよく吸った。

「付き合ってはいいえなあ。要するに、亜紀が居候してるんだあ。」

…あいつは真治と付き合ってるときに親から家え追いだされちゃったな。真治と別れてからは、本当に行くところ無しになっちまってたんだあ？ んで、俺あ心配してたんだが、気が付いたら良太ん家に転がりこんどった」

正也は腕を組み、体を左右に揺らしながら坐りなおした。

「居候って、あいつの家、余ってる部屋なんてあったか？」

正也は首を振るだけだった。

「なら、一部屋に二人が住んでるってことか？」

正也は反応しない。

「それって、成立するのかわかるか？」

「…やっぱいい、そう思うべ？ 俺だったら、一日とこつちの方がもたんもんなあ」

頭を垂れながら正也は笑った。武雄も笑った。ある程度降り積もった後、踏み固められた雪の道に差し掛かっていた。

「俺ああいつの本心がわからん」

対向車線の車のライトが眩しかった。正也は顰め面をしたかと思うと、急に真剣な声を出した。

「良太はあの子が好きだぞ」

武雄は正也の顔を窺った。彼は武雄を一瞥してから窓外を向いた。「だからわからんのじゃ、あいつあ何を思つとる？ あいつは無邪気じゃ。普段は底抜けに無邪気じゃ。でもなあ、時たまじゃが、恐ろしい目をしよる。本当じゃ。よくわからんが、こつちがとられそうになる。曇つとる、鋭くて、ねっとりとした目じゃ。…だからあわからん。あいつは良太の気持ちを利用しとるんか。それとも知らんで、無邪気に良太を頼つとるだけなんか」

いつの間にか正也は武雄に向きを直して訊ねていた。武雄はわざとラジオの音量を下げた。

「どつちにせよ、二人がくつつけば良いんじゃないのか？」

正也は暫く答えなかった。定期的に街路樹から抜けた月明かりがその横顔を照らした。

良太はええ奴過ぎるからのお。呟いた正也は、ゆっくりと頬杖をついた。

## 第二話

2

「おまえ、覚えてるかあ？」

最近この言葉をよく耳にする。不機嫌さを隠そうとしない武雄にそう訊きながら、正也は後輩の崇と真治に昔話を聞かせているのだ。つた。

「部活の先輩に、屋代ってやつがいただろ？　いつか、俺達やそいつに呼び出されたんだ。あん時や確か、良太も一緒じゃったのお。俺がまだまじめに部活動うちゅうもんのうちこんどつた頃の話じゃ」  
幼少時代の正也は、いわゆる天才児として扱われていた。生粋のサッカー小僧だった彼が部活動をサボりだした拳句、退部した理由は、武雄にとつて未だに謎であった。

「あの頃あ先輩の言うことは絶対だったけえ、いけすかねえ奴の呼び出しでも、俺達あしょうがなく出向いたんだあ？　特にその屋代つてのは始末に終えねえやつでな。先輩つてことだけを傘に掛けて、何の用もねえのに呼び出しやがるんだ」

「用もないのに、ですか？」

「おおよ。その日もやつぱし何で呼ばれたんかもわからんまま、気づいたらそいつんちの、そいつのきつたねえ布団の傍に三人しゃんと並んで正座させられとつた」

自分の殻に閉じ困っている風を装っている武雄は、聞いていないように、正也の話している情景を思い出していた。

屋代という先輩の顔は、一向に浮かんでこなかった。ただ、布団に片足を突っ込んだ男性の、未発達な上半身があらわになった情景だけが、鮮明に思い出されていた。自分達に背を向け、首まで布団に包まった先輩ごしに、これまでに聞いたこともないような女の声がした。

「　　ねえ、しちやおうよ…なんて女が言いやがったのを、おれ

あはつきり覚えとる。俺はそんな時、始めて女の、本当の声を聞いた気がしたなあ」

「それはやっぱし、喘ぎ声ってやつですか？」

そういつて、崇と正也が豪快に笑った。今思えば、あの時の先輩は、ふざけて後輩達の反応を楽しんでいただけなのかもしれない。ただ、布団一枚を挟んだところで、全く現実味のない行為が行われているのだという詮索が、後輩達を夢中にさせていたことだけは確かだった。

「これ見よがしにいちゃいちゃしくさつてな？　なんで俺たちあんなところに折るんじやつて、おれあそんな時おもつたな」

ベッドで大半のスペースが埋まった部屋の隅に三人正座して、先輩の恋人の声を聞く。確か、一番端に坐っていた武雄も、布団の中を覗こうと顔を延ばしたのだった。幼い恋人達は、不器用に唇を押し付けあっていた。それを見た武雄は、何処か違和感を覚え、無意味な嫉妬もあつたせいも、妙に冷静でいたことを覚えている。

「あいつらあ顔だけ出して、ブキツチョにチュ　して見せるんよ。今おもやあひどくぎこちなかつたなあ。でもなあ、そんなことにもおれあ気づかんかった。無理もない。そんな光景、始めてみたんじやから」

奇妙な光景だった。冷静さを取り戻していた武雄は、面白半分到一个隣の正也と、二個隣の良太の股間を除いたのだった。予想通りそろつて張っている股間を見て可笑しくなり、正也たちの鼻の下が伸びた表情を拝むつもりで顔を上げた。案の定、正也は充血した目を布団のほうへ向け、夢中になっていた。武雄はなんだかうれしくなつて、良太を見た。底には、正也の股間に見入っていた良太がいた。武雄にはそう見えた。が、それを確かめる間も無く、良太は敏感に武雄の視線に気付き、目を合わせようとしながら、そうせず、彼から顔を背けたのだった。

「おう、武雄、聞いたとるんか？　あん時の八代の女、覚えてるか？

川野辺なんて珍しい名前じゃから、覚えとるじゃろ」

上の空から引き戻された武雄は、自然に首を振っていた。

「実はそいつら、お前が東京者になつとる間に、結婚しくさったんじゃない」

武雄は、あわてて正也の表情を確かめた。正也は、武雄の表情を見て笑った。

「あん時わしらあ、要するに、夫婦の営みを見せ付けられとったんじゃないなあ」

正也はそういうと、何かを期待した風に崇のほうを向き、笑い出した崇を見て、満足げに笑った。

正也と崇は考えなしに酒を煽り続けた。だが武雄は妙に酔いの回りを感ぜずにいた。それは、正也の介抱をする羽目になるとうすうす感付いていたからでもあり、面識の薄い後輩達と席を共にしていたからでもあった。

「あいつはおれを利用していたんですよ」

正也と崇は仲良く潰れていた。真治だけが悪酔いして、管を巻いていた。

「あいつって、亜紀のことか？」

思わず訊ねたが、真治は答えず、乱暴に酒を注ぎ足した。

「…考えれば、あいつは何にも悪いことをしていないんですよ」

「何も悪いことをしていないのに、お前は利用されていたと思うのか？」

「あいつ、毎日のように泊まりにきて、確かに俺もそれだけで楽しかった。でも、男と女ですからね？ 期待しないほうがおかしいでしょ？ それにあいつ、時々本当に物欲しそうな目をこっちに向けてくるんですよ」

「何だお前たち、結局何も無かったのか？」

意外に感じたまま訊いた。真治は酒を強引に咽喉の奥へと押し込むと、いじけた様子で首を振った。

「あつたにはあつたんですよ。…でも今考えれば、それは全部、俺が強引に求めたときだった気がしてならないんです」

「あつちからは言つてこなかつたのか？」

「あいつ、いつもは笑つて断るくせに、おれが強くとんだか諦めたようになつちまって…。でもおれは納まりがつかなくなつてゐるし、あいつは何も言わないけど、オーケーだしてくれただと思つてゐるんですけど…」

真治は武雄の問に肯くと、片手にコップを持ったままテーブルに突つ伏した。

「若いうちに男ががつつくのは当然だつて」

真治の背中に浴びせたが、彼の耳にその言葉は届いていないようだった。

どうして真治が亜紀に利用されていたと思ひ込んだのか。その理由は定かではないが、昨日の正也の言葉もあり、単に真治の悪態のように聞こえた中にも、武雄には、何か含みが感じられた気がした。

### 第3話

3

数日前に日を跨いで降った雪が凍結し、でこぼこに固まった道路を、車は皆、低速で進んでいた。武雄は車の、溝の無いタイヤを滑らせながら、やっとの思いで良太の家まで辿り着いた。普段は住宅街の垣根に寄せてそのまま路上駐車してしまうのだが、その日は端に汚れた雪が積まれている、結局近くの本屋に車を止めた。

本屋から良太の家までは歩いて五分とかからなかったのだが、その間にも武雄のつま先は感覚を無くすほど凍えあがった。

良太の部屋に入るなり、一目散にコタツへ足を入れた。最小クラスのコタツには、何対かの足が無理に押し込まれており、冷えた足に触れたそれらは悲鳴を上げたあと、武雄を一斉に非難した。

「お前いい加減、ヒーター買えよ」

それが冬になると決まって良太に向けられる言葉だった。六畳ほどの部屋は、コタツとオーディオ、テレビにベッドだけで、あとはそれらの隙間にしか足の踏み場が無かった。

室内にいても、吐く息が白かった。良太は黙々と遅い昼食を摂っていた。亜紀は雑誌を広げ、崇と自分を遮っていたのだが、下では不機嫌そうに、もそもそと体を擦っていた。崇は真顔で、亜紀の股間に足を入れて遊んでいた。ベッドの上でギターの練習をする智和も含め、全員が前傾姿勢でいた。

「いい加減やめてよ」

痺れを切らした亜紀が、雑誌を置き、冗談を捨て切れない睨みを崇に向けた。

「この前、真治と飲んだぞ」

亜紀の視線を真っ向から受け止め、逆に粘り気のある目を向けた崇は、武雄と良太の足の下から突き上げる攻撃をやめようとしなかった。亜紀は平気そうな顔で防御に徹していた。

「真治の奴、一人だけやけにハイペースでな。頼んでもいないのに、あつという間に出来上がつちまつたんだよ」

唾を飛ばすくらいの大声で崇は話したが、誰も聞いているようすをしていなかった。武雄は良太の方を伺ってばかりいた。いつもなら何かが起こる前の雰囲気を感じ、すかさず何らかのフォローをするはずなのだが。

「あいつ、勝手に話し始めたんだよ、お前とのこと」

「おれも一緒にいたけど、あいつは絡み酒なんだな？」

武雄は咄嗟にフォローを入れた。一瞬武雄に笑みを向けようとした亜紀であったが、結局自分の身を守ることに集中することになった。良太は残り三つになった黒豆を箸で摘まむことに集中しているようだ。

「騙された。そう言ってたよ、あいつ」

「男ってというのは、フラれると決まってる感じがするもんなんだよ」

「武雄さん、やめるよう言ってくれませんか？」

身を擦ったまま少し強い眼差しを向けられ、武雄は崇に視線を送った。殆ど面識の無い後輩であったが、武雄の合図に従い、ピタッとコタツの下の猛攻を停止した。

「利用されたって言ってたぞ？」

やめるよう合図を送ったのは、会話も同様だったのだが、崇には伝わっていなかったらしい。

「真治は、亜紀は何も悪くないとも言っていたよ」

「武雄さん、あいつと話したんですか？」

後輩と余り話さない武雄を知っている崇は、押し付けた声を向けた。

「ああ、お前と正也が潰れてから、少しな」

返答に崇は僅かに慚然とした表情を溢した。

「なんで真治と別れた？」

崇は唐突に訊ねた。

「おい、いい加減にしとけや」

練習後のチューニングを終えた智和が口を挟んだ。崇は従順に口を噤んだが、亜紀から目を離そうとはしなかった。

ギターを受け取り、武雄は智和と入れ替わる形でベッドの上に乗った。智和は良太が食事を終えると、結婚式を挙げないという正也の為に内々で披露パーティーを催そうと提案した。彼は良太にタウンページを持ってくるよう頼み、そこから適当なレストランを探すという。武雄はギターに夢中で話に参加せず、時折良太に同意を求められても、上の空の返事を返すだけだった。

炬燵上の話は盛り上がるだけ盛り上がり、終いには固定電話の子機が持ち出された。開かれたタウンページに置かれた子機を誰が使うのかを決めているらしかった。開かれたページには赤線が殆どの行に引かれており、亜紀が仕切りにその頭を指し、何かを訴えていた。

武雄は気にせずギターを引き続けた。アンプを繋げていないせいもあるが、智和たちは慣れたもので、その音を気にしているそぶりは見せなかった。

結局電話を掛けたのは崇だった。だがそれは間も無く良太に渡され、智和に渡された。長い間話す彼の言葉を炬燵の全員が見守った。電話が切られてもそれは変わらなかった。そして、不満顔のまま智和は唐突に立ち上がり、捲くし立てた後、部屋を後にした。全員がその後を追おうと慌ててコートなどを着始めたが、武雄は相変わらずギターを弾いていた。

「結局自分達の目で確かめにや決めらんないってことになったんだ」最後に部屋を出ようとしていた良太が武雄にそう告げた。

「見てみないことには大きさも正確にはわからんしな。それに、仮に予約しても、その店、貸し切りに出来るの、三カ月後だなんていやがったもんだが、崇のやつが怒つちまって」

苦笑いを浮かべると、良太はそのまま部屋の窓を閉めた。外から砂利をける音が微かに聞こえてきた。きつと亜紀が、入らないブーツを押し込んでいるのだろう。

ギターに集中しかけていた武雄の憶測は裏切られ、すぐに部屋の窓が再び開けられた。

「どうしたんだ？」

驚いて、武雄は延々と続けていたピッキングを止めてしまった。亜紀は何も言わずブーツを投げ捨て、コタツに足を差し入れた。一人で不貞腐れていた。武雄はなんだか、もう一度弾き始める気を失ってしまった、ギターを置き、自分もコタツに入り込んだ。

聞けば、智和の小さなスポーツカーに乗れるのは三人までで、自分も乗せてもらえなかったのだという。リアシートに縮こまりながらも、勝利の笑みを浮かべる崇の顔が目に見えた。

「やつらを追いかけようか」

冷え切った指先をコタツに当て、揉みながら武雄は亜紀に自分の車のキーをとるよう促した。が、彼女は脹れさせていた頬の空気を抜き、そのまま着地するようにコタツにあごを乗せて見せた。

「あたしはここで待ってます。待ちましょ？」

首を傾げ、亜紀は武雄を見上げた。

## 第4話

時折窓越しにぼったりと雪が落ちる音が聞こえるだけの室内に居心地を悪くした武雄だった。何をしてもなくコタツで丸くなる亜紀の存在を月刊の音楽誌で隠す。が、彼女の息遣いまでは隠せない。かえって視線の行方が気になる。

「東京ってどんなところなんですか？」

雑誌を退かしてみると、亜紀は綺麗に背筋を伸ばしていた。微笑んで、武雄を見つめていた。

「行ったことあるだろ？」

「あるけど、渋谷とか原宿だけだし…。実際すんで見ないとわからないことだってあるじゃないですか」

「変わらないよ」

雑誌に目を落とし素っ気無くすると、亜紀は少し膨れっ面をして見せた。

「…住んでみたいなあ、東京」

「いつか、住んでみればいいじゃないか」

しみじみと言われた言葉に、無闇に相槌を打った武雄であったが、視線を上げた先にあつた亜紀の表情に息を呑むことになった。

「あたし一人じゃ、一生ここから抜け出せませんよ」

顔は笑っていたが、ひどく挑戦的な視線を向けられている気がした。瞳は、反発を媚で塗り固めているように濡れていた。

本意を計りかねる表情に声も出せなくなっていた武雄であったが、間も無くした、庭の砂利が削られる音に助けられた。

「いやー。おれも結局、置いてかれちゃいました」

部屋の窓が乱暴に開けられ、照れくさそうに祟が入ってきた。亜紀はその前にとっさに携帯電話を取り出していた。祟は、近くのブックセンターで立ち読みしていて、気付いたらもう車が無かったらしかった。いつものことだ。武雄はそう思いながら、何処かよそよ

そしくなつた亜紀の横顔を伺っていた。

聞いていなかった披露パーティーの企画を崇に説明してもらったが、当日には全く予定が変わっていることがしょっちゅうだったから、武雄はやはり上の空だった。

二時間も経たないうちに智和と良太は帰ってきた。その間武雄は崇にギターを教えて時間を潰していた。亜紀は男物のファッション雑誌を終始つまらなそうに眺めていた。

結局予約したレストランは、最後に下見したレストランだった。それは亜紀がしきりに何かを訴えていたところであつたが、智和は、最後に下見したところとだけいつて済ませた。

何も決まらないまま日が暮れると、アルバイトがある崇が帰ると言い出し、智和と武雄もそれに乗じて家を辞した。窓を閉めるとき、コタツの上には中学校の卒業アルバムが開かれてあり、良太と亜紀が肩を並べて、それを覗き込んでいた。

「あいつ、何時まで良太さんに迷惑掛け続けるつもりなんですかね？」

良太の家の垣根を越えると、悪びれた態度を隠さず、崇は固まつた汚い雪を蹴り飛ばした。

「確かに、良太には一人になれる時間が必要だな」

済ました顔で武雄に同意を求めてきたが、崇が大げさに賛同したのを見て、智和は歩を進めた。三人は車が止めてある本屋の駐車場まで歩いていった。寒いとき、身を縮めて固まつて歩く人、逆に小躍りするように歩く人がいるが、武雄は後者で、智和は前者だった。

「あの女、真治と別れて、親に追い出されてから、良太さんの家に居つくようになるまで、どこで寝泊りしていたと思います？」

いつでも小躍りしながら歩く崇であつたが、珍しく武雄に話を振つた彼は、しきりに腰を振って見せた。

「きつとどこかの男を引つ掛けて、飽きたらまた他の男、他の男って感じで乗り換えていたんですよ」

「冗談交じりに言っている風の崇を見て、武雄は智和に助けを求め

だが、彼は否定も肯定もせず黙ったままだった。

「良太さんも人がいいですよ。あの女のいいように取り入れられて」

その言葉に何故か無性に腹立たしさを覚えた武雄であったが、丁度駐車場に着いたこともあって、何も口にはしなかった。代わりに、

「武雄さん、今日、乗せてってもらえませんか？」

というなれなれしい崇の言葉を無視して、車のドアをロックした。

## 第5話

4

披露パーティーの打ち合わせはもっぱら良太の家で行われたが、本来盛り上げ役である正也を欠いた部屋は、やはりうまく機能せず、武雄は改めて彼の存在の大きさを思うほどだった。

「着いたら起こすんじゃないぞお」

ただ、本人を前にするとそんな気持ちは何処かへ消えてしまう。寝ぼけ眼で良太の冬山仕様の車のキャリアにスノーボードを積み、自分の荷物をトランクに押し込むと、正也はそそくさと後部座席に乗り込み、腕を組み、完全に寝入る体制を取った。

残り少ない休みを有意義なものにしようと、武雄は良太と正也をスノーボードに誘っていた。夜も明けないうちから車で福島に向かったのは、一日分のリフト券をフルに使うというせせこましい目論見からであった。

二時間半ほどのドライブで車はスキー場近くの専用駐車場へ到着した。眠りを貪る良太と正也、そして勝手についてきた崇をよそに、一人眠りもせず、かといって運転する武雄に話しかけるでもなく、亜紀は道中、移り変わる窓外の景色をただボンヤリと眺めているだけだった。

「わたし、あそこの山にあるリフト、ちっちゃい時から飽きるほど見上げてきたんですけど、実際には一度も乗ったことないんですね」

駐車場でスキー場が開くのを待っていると、突然亜紀が口を開いた。視線は、山の頂上辺りを見ているようだった。

「スノーボードやったこと、あるんだっけ？」

ボードは勿論、ウェアなど何一つスキーに関するものを持ち合わせていなかった亜紀を不思議に思っ、武雄はミラー越しに彼女を見た。亜紀は首を振り、やったことない、と微笑みながら答えた。

「外に出てみませんか？」

ミラー越しに武雄を見てきた亜紀に彼は一瞬戸惑ったが、平静を装ってドアロックを解除した。

ドアを閉めると、外の空気を一杯に吸った。同時に、身震いするほどの寒さが、武雄の体の中に入り込んだ。暖房の効きすぎた車内に長時間いた彼には、それがひどく心地良く感じられた。

「車から出て、雪山の空気を胸いっぱい吸い込む瞬間って、すごく気持ちよくありません？」

その言葉に、自分の心を読まれたような恥ずかしさを感じた武雄は、それをごまかすために歩き出した。遠くに、暗闇に一際目を引く明かりを灯す自動販売機があった。

「子供の頃は、毎年来ていたんですよ、ここ」

辺りは、いくつかの車が散り散りにあるだけで、閑散としていた。ちょうど夜の闇が薄められ、朝の強い日差しをまつ時間であった。

武雄は、その判然としない暗闇やら明るみが、まどろむ頭と相俟って嫌いではなかった。

「でも、その頃はスノーボー、まだ流行っていなかったから、私はスキーしかしたことないんですよ」

「じゃあ、今日がスノーボー初体験だ？」

武雄がそう聞くと、亜紀は満面に笑みを浮かべ、大きく頷いて見せた。ひどく嬉しそうだった。これが正也の言う、亜紀の無邪気さなのだろうか。ふとそんな考えが頭を過ぎった。

五人分のホット缶コーヒーを買い、その一つを啜っていると、掌に一片の雪が落ち着いた。見上げると、厚い雲が空を覆っていた。

朝日は見られるだろうか。コーヒーを一口すすることに、空の明るさが変わるようだった。

「そういえば、スキーやっていたんなら、あのリフトにも乗ったんじゃないの？」

上の空で武雄は、そう聞いていた。吹雪にはならないでくれと思いい、コーヒーを手で挟みながら空に挿んでいた。

「よく覚えていないんですけど、毎年来ていたのは小さいころだったし、結局、あのリフトに乗るのはまだ早いつて判断されていたんだと思います」

「じゃあ、今年はどんどん上達して、あそこに乗れるようになるといいな」

武雄の冬山使用のボックスカーは、震えながら、夥しい量の湯気をとめどなく吐き出していた。彼の体はすっかり冷えていた。亜紀は四人分のコーヒーを暖かそうに抱いていた。

「何年越し？」

唐突にそう聞いたせいか、亜紀は武雄の顔を伺った。

「いや、何年越しで、そのリフトに乗るんだろうと思って。ずっと乗りたいと思っていただけでしょ？」

ドアに手を掛けながらそう聞くと、武雄はなぜだか少し照れくさくなった。

少し考えるそぶりを見せたが、亜紀は微笑み、首を振って武雄を見ただけで、そのままドアを開けた。

## 第六話

スキー場にいるとき、武雄は、食事のとき意外は、殆ど一人でリフトの乗り降りを繰り返した。彼の中では、楽しくというより、よりうまくやりたいという気持ちのほうが大きかった。正也も同じようなところがあり、着いてきたがる祟を振りきっているのだと、武雄と会うたびに言っていた。良太は亜紀に付き切りでいたようだった。

日が暮れる前に、武雄たちはスキー場を後にした。全員が全員疲れきった様子で、夕食をとり、ペンション風の民宿に着くまで、車内は静かなものだった。ただ、疲れたのか、はしゃぎすぎたのか、亜紀の少しかすれた道案内をする声が、時折武雄に向けられた。

民宿は、日光駅（福島）の近くにする。栃木県から抜け出せないんだから日光にしたほうが言い？の近くにあった。そこは小さくフロントもあってないようなものだったが、亜紀は先頭を切り、慣れた様子で四人部屋のキーを取ってきた。

「どういうこと？」

少し面喰らって武雄はそう祟に尋ねた。聞けば、そこは亜紀の親戚が営む民宿なのだという。

「宿代が安くなるから、今回は珍しく一泊することにしたんじゃないですか」

宿泊することに何の疑問も持っていなかった武雄だが、確かに、正也たちと出かけるとき、泊りがけになることは少なかった。ただ、いわれて初めて珍しいとおもう位、彼にとってはどうでもいいことのように思われた。

「んで、宿代が安くなるから、仕方なく、あいつも連れてきてやることにしたんじゃないですか」

億劫そうにバッグを担ぐと、祟は部屋に続く階段を上り始めた。

正也たちは部屋に入るなり布団を敷き、あらかじめ用意していた

酒の栓を開け始めた。武雄は一人、民宿の一階まで降り、小さな暖炉を囲むソファーに腰を下ろした。丁度食事時のせいか、暖炉の周りに人影は無かった。奥の方で食器が重なる音がしていたが、薪が焼ける音は聞こえる。比較的静かだった。

「何しているんですか？」

頬に冷たい指先を当てられ、驚いて振り向くと、そこには、エプロンをした亜紀が、意地悪な笑顔を浮かべて立っていた。

「手伝ってるんだ？」

「ええ、そういう契約なんで」

雪焼けで火照った頬に、亜紀の指先の感触が心地よく残っているようだった。

「気に入りました？」

「何？」

「暖炉ですよ」

そういつて暖炉に向いた亜紀の瞳に、炎を見た武雄は、

「ああ、気に入ったよ。全く人がいないって所が実にいい」

とおどけて見せた。すると亜紀は、わざと憤った様子を見せ、

「今は丁度食事時だからですよ。食事が終わったら、ここだってソファーが埋まっちゃうんですから」

とふざけて見せた。

「じゃあ、それまで精々くつろいでいますよ」

「ええ、束の間でしょうが、おくつろぎください」

笑ってそういつた後、亜紀は一旦手伝いに戻る気配を見せた。が、そうだと再び何かを思い立ったようにした後、

「お風呂のことなんですけど、できれば一般のお客さんが入り終ってから入ってもらいたいですよね」

と申し訳なさそうに言った。

「それで、できればこのこと、武雄さんの口からみんなに伝えて欲しいんですよ。ほら、私が言うより武雄さんが言ったほうがみんな言うこと聞いてくれるし」

お盆を脇に挟み、手を合わせ頼む亜紀の姿を見て、武雄は断る理由も無いと思い、肯き、軽く手を挙げて見せた。

正也たちは疲れなど微塵も感じさせず、いつものように夜遅くまで飲み明かしていた。だから、武雄が風呂のことに關して忠告をするまでも無かったが、旅館と違い、二十四時間風呂が沸いているわけでもなかったたので、日付が変わる前には入りに行った。

風呂から出た後も、正也たちは直ぐ部屋に戻り、飲みの続きを始めた。武雄は明日の為に眠りたかったのだが、騒いでいる中で眠れるはずも無く、仕方なく部屋を出、一階に下った。

「あら。亜紀ちゃん、疲れていたみたいで、もう寝ちゃったみたいよ?」

暖炉の火を調整していた中年の女性が、火に照らされただけの顔を武雄に向けていた。一階の電灯は殆ど落とされ、辺りは暖炉の灯りだけで照らされていた。

武雄は一頻り宿代などのことに關して礼を言った後、

「暖炉の火は、一日中落とさないんですか?」

と訊ねると、女性は肯いた。

「この時期は廊下も凍えるほど寒くなっちゃうから、暖炉をつけてできるだけ室内との温度差を和らげているのよ」

「へー。ちゃんと客のこと、考えているんですね」

武雄が感心してそういうと、女性は少し恥ずかしそうに、

「こんなに小さくてボロのペンションをやってくには、いろんなことに気を使わなくちゃならないのさ」

と肩をすくめて見せた。

暖炉の火の調節を終えると、女性は、赤黒く焼かれた薪を確かめながら、武雄の横へ坐った。

「あなた、亜紀ちゃんが付き合っている人たちとはなんだか違う感じだけだ」

女性の言った言葉の意味が掴めず、何も応えずに入ると、

「正直、あたし、亜紀ちゃんのこと、心配でしようがないんだよね」

と無造作に切り出した。確かに、別の部屋になったとは言え、親戚の娘が、女一人で四人もの男を連れてくれば、心配になるのも無理は無い。無論、正也たちのような風貌の輩を連れてくれば、なおさらだ。

「あの子、夏に実家を出たでしょ？ それで、実は暫くここに来ていたのよね。でも、その時は繁忙期じゃなかったから、実際、手伝いなんて要らなかったのよ。亜紀ちゃんには悪かったんだけど、その時は気付かないうちにそんな雰囲気を出していたのかもしれないあの子、そういうのにすごく敏感なのよね。それで、結局、行くところができたって言って、突然家から出ていつちゃったのよ」

民宿の外には明かり一つ無く、武雄の目には、両手で顔を覆った女性の赤く照らされた手のひらを確認できるだけだった。

「久しぶりに電話があったから、うれしかったんだけど、実際ここに来たら、女の子は亜紀ちゃんだけだったんだもの、心配しないほうがおかしいじゃない」

「心配には及びません。ちゃんとうまくやっていますよ、彼女」

武雄は何を入れて言いかかわらず、安易にそんな言葉を吐いた。

「あの子、今、どこにいるの？」

「部屋にいる三人の中の一人の家に居候しています」

「…付き合っているんだ？」

女性は当然そう尋ねてきたが、武雄は答えに窮し、

「直にそうなる予定です」

と答えた。

「いつも楽しそうにしていますよ、彼女は」

「…苦しい時こそ、そんな顔をして見せない子なのよ、あの子は」

女性は立ち上がると、伸びをして見せた後、武雄の肩に手を乗せた。

「とにかくあだし、亜紀ちゃんのこと心配なの」

女性の手は、暖炉の火で照らされただけでもわかるほど、家事で荒れた手だった。彼女は口元を武雄の耳元までもっていき、

「亜紀ちゃんの今後、報告してくれる？ そしたら、何時来ても宿代負けてあげるから」

と言うと、肩を叩き、去り際に、

「できれば、あんたみたいな人があの子の相手だったらよかったんだけど」

と聞こえるように呟いた。一人取り残された武雄であった。暖炉の赤い薪の火は、何時までもちりちりと彼を暖め続けた。

## 第七話

5

携帯電話が振るえ、机を鳴らしていた。手に取りディスプレイを確かめると未登録の番号が表示されていたので、武雄はそのまま放置した。着信はすぐに伝言サービスに切り替わったが、メッセージが吹き込まれる前に切れた。

「正也が今度、結婚することになった」

それとなく告げられると、幸は身を強張らせた。武雄は構わず幸の身体を背中から抱いた。

「女を孕ませて、その責任を取るんだそうだ」

武雄の腕からうまく体を抜くと、幸はひどく気だるい表情のまま立ち上がった。

「お前に同じことをしても、あいつは責任なんて取るうとしなかったのに」

離れる背中に、武雄はそんな言葉を浴びせた。幸は何も言わず、脱ぎ捨ててあったショーツに足を通すだけだった。

短い冬休みを終え、武雄は東京へ戻っていた。休日には、必ずといっていいほど、小岩にある幸の住むマンションを訪ねていた。智和も、良太も、正也も、幸の行方を知らなかった。ただ、武雄だけは彼女の居場所を知っていた。それは、偶然ではなかった。幸が子供を生み、智和たちの前から姿を消した後も、二人は連絡を取り続けていたのだった。

「どうしておれにだけは電話くれたの？」

武雄は興味も無いのに、そんな質問をしたことがあった。

「当時は、あなたが一番無害なんだと思っていたんだと思う」

幸の答えはこうだった。

二人は着替えると部屋を出、近所にあるコーヒーストップに入った。幸はそこを気に入っていたが、武雄は気に入っていなかった。

「どうかした？」

幸の様子はいつもと変わらなかったが、不在着信のあった携帯電話を畳むと、武雄はそう訊いた。

「実は、仕事、首になりそうなのよ」

ため息をついた後、幸は自らマフラーで首を絞めて見せ、苦笑しながら、いいえ、と首を振り、確実に辞めることになるでしょうね、と訂正した。

「むかつく女がいて、私、そいつのこと大嫌いだから、目の敵にしていたのよ。でも、そいつ、いつの間にかうちのチーフとできてたらしくて、きつと取り入っただけなんでしょうけど、結局、気づいたら私を通り越して、異例のスピード出世ってやつをしちゃったのよ。それで、今度は仕返して、私が目の敵にされてるってわけ。それもあからさまに。あからさまにね」

詳しくは知らなかったが、幸はそのアパレル会社に少なくとも四年以上勤務していた。武雄はふと、幸の言うむかつく女が、何年目で彼女の上司になったのだろうと考えた。

「お前は どうして、そのむかつく女ってやつにむかっていたの？」

武雄の間にも幸は答えず、割と上品にカフェオレを啜って見せた。

程なく大学の年度末テストが始まり、武雄はその日程に追われて過ごしていた。忙しい時期だった。忙しいにもかかわらず、週に二度は決まって正也の披露宴についての報告と相談の電話が良太からかかってきていた。

忙しい時期だった。武雄は忙しいとき、人との関わりを煩わしく思ってしまう嫌いがあった。だからなのか、目立った理由もなく、彼は幸からの電話の着信を拾わずにいた。彼女は十日に一度の割合で電話を掛けてきた。武雄は三度、その電話を取らずにおいた。一ヶ月弱の間、彼は幸の声すら聞いていなかった。大学の年末テストは終盤に差し掛かっていた。

「何で電話にでてくれないのよ」

幸はコタツに入り、テレビのバラエティー番組を眺めたままそういった。電話に出なかったことなど、少しも気にしている風ではなかった。

「どうしてこんな所まで来たんだよ」

「電話、出てくれないから」

散らばった雑誌やらプリント類をどかしながら、武雄はコタツに足をつ込んだ。部屋の灯りが付いていることを確認していた武雄は、無断で幸が自分の部屋に上がりこんでいたことにも驚かなかった。

「ちゃんと鍵くらい掛けときなさいよ」

武雄がテレビを消すと、幸は傍らに落ちていたらしいポルノ雑誌を手に取った。

「どうして来た？」

バッグからありつただけの参考書を取り出し、コタツの上へ置いてみせた。埃が立ち上ったらしく、幸は大げさに咳き込んだ。

「最終日まで予定が詰まってる。でもあと三科目でテストも終わるんだ。その後は、実家に帰るまでの間は暇ができるんだ」

武雄が参考書を開くと、幸はポルノ雑誌を開いた。表紙はどこにでもいるような女子高生のグラビアだったのだが、中身ではSM趣味の特集が組まれているのを、武雄は知っていた。

「そうだ、どこか遠出してみないか？ お前、いつつも楽しそうに旅行ガイド見てるじゃないか」

「それで、その先で、こんなことしようとしているんだ？」

幸は挑発的にそういい、体が反り返り、丁度水泳のバタフライをしているような格好のまま宙吊りにされている女性の写真を広げて見せた。舌を木製の洗濯バサミで摘まれ、粘ついた涎がその先から切れないまま長く垂れている。目隠しされ、体中には縄がこれでもかというくらいに食い込んでいる。乳房が押し出され、パンパンに張っている。油でも塗られているのか、高潮した頬も、涎も、乳房も、陰毛も、強烈なライトで艶やかに照らされている。それは如何

にも張り詰めた様子ではあったが、何処かに弛緩が見られるようでもあった。(諦めという弛緩 こんな描写必要ない?)

雑誌を取り上げると、幸はつまらなそうに、

「仕事、先週辞めたの」

と告げた。彼女は余り気にしていないそぶり、傍にあった別のポルノ雑誌に手を伸ばした。

「そんなに簡単に辞めちゃっていいのかよ」

テキストを閉じ、武雄は顔を上げた。

「お前、あそこ、東京に出てきて間もない頃から働かせてもらっていた所なんだろう？」

武雄は安易にそう尋ねたが、先週辞めたなら、今となってはもう取り返しの付かないことになっているということくらいは彼にもわかっていった。

「で？ これからどうする気なの？」

テキストを広げ直したが、幸が立ち上がったので、武雄は顔を下げられなかった。

「これから私、武雄に電話しないようにするから、武雄も私に電話、掛けてこないでほしいの」

普段となんら変わった様子もない幸であったが、そもそも彼女が武雄の部屋に尋ねてきたこと自体がおかしくはあった。

「なんだよ、それ？」

「なんだって、つまり、そういうことよ。そうしたいと思っているの」

「何？ もしかして電話に出なかったこと、怒ってるの？ それなら謝るよ。お前が大変なときに相談に乗れなかったことも悪いと思っっているから」

部屋を後にするそぶりを見せたが、武雄に引き止められ、幸はまるで他人事のように、

「別に怒ってないわよ。それは全然気にしてないから」と首を振って見せた。

「じゃあなんだってんだよ。電話しないでって、そしたら、おれとはもう会わないって言うのかよ」

幸は武雄の間に戸惑いながらも曖昧に頷いて見せた。早足で玄関に向かった幸を、武雄は慌てて追いかけた。

「何かわからないんだけど、仕事も辞めたし、いい機会だから、武雄と会うのも、もう止めた方がいいと思ったんだよね」

下駄箱に手を付き幸の様子を窺う武雄に、彼女は早口でそう告げた。忙しなくブーツを履く様が、今にも何処か遠くへ行こうとしているように、彼の目には映った。

「わかったよ。けど、電話は今までどおりくれよ。今度からは絶対できるようにするから。それくらい、いいだろ？」

ドアに手を掛けた幸にそう告げた。

「お前、おれと電話しなくなったら、他の誰と連絡取れるって言うんだよ」

武雄は幸を引きとめようとしたが、彼女は曖昧な微笑を向けただけで、部屋を出て行ってしまった。

「なんだよ。何考えてるんだよ。どうせ、すぐに寂しくなって電話してくるくせに」

閉まったドアに向かって憤りをぶつけた武雄だが、判然としない気持ちのままコタツへ戻るしかなかった。暫く、携帯電話が気になつて仕方がなかった。

持て余していた電話の着信音が鳴ったのは、その日のテレビの番組が全て終了し、画面いっぱい砂嵐が映し出されている頃だった。武雄は座椅子に坐りながら半分眠っていたので、それに気付くと慌てて通話ボタンを押した。

「今どこにいるんだ？」

武雄は通話と同時に電話の向こうの様子を窺った。

「…自分の部屋ですけど…武雄さん、何かあったんすか？」

切迫した声を聞いたからか、祟も合わせて声のトーンを落としたようだった。武雄は頂垂れて、

「ああ。何でもない」

お前だったか、という言葉を口に押し込んだ。

「なんだあ、こんな時だったのに、武雄さんも変なんだもんなあ」

「…おれは変じゃない。それより、こんな時ってなんのことだ？」

崇の能天気な声に腹立ちながらも、些か救われた観もあった武雄は、普段なら殆ど会話もしない相手の話を聞いてやるうという気になっっていた。

「実はですね、最近良太さんの様子がおかしいんですよ。なんていっただらいいかわかんないんですけど、いつもの良太さんじゃないっていうか。実際忙しい人ですから、疲れているんだとは思うんですけど、簡単に言っちゃえば、あんまり遊んでくれないですよね」

本当に困った風なため息を受話器に吹きかけてくる崇に、武雄はため息をつき返した。

「それで、おかしくなる前に何か変わったことはなかったのか？」

「良太さん、正也さんの披露宴の幹事の仕事ほとんど一人でやっているから、それかもしれないですけど。あと、変わったことって言うほどでもないんですけど、強いて言えば、ちょっと前に亜紀の奴が漸く良太さんの家から出ていきました。あとは…」

何か変わったことを頭からひねり出そうとしていたらしい崇であったが、後が続かなかった。

「亜紀、出て行ったのか？」

「ええ、きつと追い出されたんでしょうね」

「あいつ、行くところなしだったんだよな？ 今どこにいるんだ？」

何とはなしにそう聞いた武雄であったが、言った傍から幸の顔が頭によぎった。

「それが、何も言わずに出て行ったきり音沙汰ないらしいんですよ。失礼な奴なんですよ、あいつは」

「電話は掛けてみたのか？」

「ええ。でも、一向に出る気配がないんですよ。ま、どうせまた違う男でも見つけたんでしょうね、きつと」

崇はその後、散々亜紀の誹謗中傷を重ねた末、なお気が晴れない様子のまま電話を切った。

電話を切ったその手で、武雄は過去の着信履歴を遡った。最後に幸と寝た日、二度、未登録の同じ番号から電話が掛かってきていた。武雄は、亜紀の電話番号を知らなかった。

## 第八話

実家に帰るまでに武雄は幸へ三度ほど電話を掛けた。つながりはするが、一度も通話されることはなかった。

武雄は、着信履歴にある未登録の番号を電話帳の地元グループの部に振り分けて登録した。登録名は、仮に、Aとした。武雄はその番号にリダイヤルしようか迷った挙句、できないでいた。

おかしくなつたといわれた良太であったが、正也の披露宴に関する仕事は、ほぼ順調にこなしていた。が、出席者の人数の把握が唯一うまくなされていなかった。良太たちは、披露宴の通知とはいえ、形式的な往復葉書で出欠の確認をするわけでもなく、実際は直接電話でその旨を話した際、意志を確認する方法を取っていた。その為その意思を留保されることが多く、結局は後日改めて確認をとるという二度手間を強いられ、武雄もその役目に負われることとなったのだった。

「亜紀の奴は披露宴の日取りも式場も知っているんだ。きっと来るだろうから、人数に入れとけや」

難しい顔をしながら名簿を見つめ、智和は崇を一瞥した。良太の部屋の使い古したコタツに名簿を広げ、亜紀の名前の横に丸をつけると、崇は何事もなかったように次に書かれてある名前を読んだ。難航した出欠の確認も名簿を一本化したこともあり、概ね済みつつあった。

「幸さんは？ 幸さんは連絡ついたんでしたっけ？」

「…あいつ、まだ番号そのままだったのか？」

崇の能天気な声を受け、智和は武雄に顔を向けた。

「まだ繋がりはするけど、やっぱり出てくれない。お前もしてみたか？」

訊ねると、智和は曖昧に首を振った。

幸と智和は、同じ地区に家があり、いわゆる幼馴染だった。智和は、小学校に上がる前から、幸のことを想い続けてきた。それは周知の事実で、何度か告白もしたらしい。

幸と智和が道を違えたのは、高校に進学したときだった。幸は女子高に、智和は男子校にそれぞれ進んだ。智和には、女ができた。幸にも男ができた。それでも彼は、彼女を思い続けていた。

それを証明する出来事に、武雄は立ち会った。経緯は詳しくないが、疎遠になりつつあった二人が、急接近していたのは事実だった。当時の溜まり場だった智和の家に、幸が遊びに来る回数が圧倒的に増えていた。

集まっていた数人を帰り、智和は、家まで送るといって幸を引き止めたらしかった。武雄も気を利かせて早々に辞そうとしていたのだが、引き止められた。真夜中、賑やかな輩達がいなくなった部屋は、虫の鳴き声が聞こえるほど静かだった。夏から秋へ、季節の移り変わりの時期だった。

「三人ならもう少し、いてくれるって言うんだよ」

智和は珍しく懇願していた。武雄の袖を引っ張って引き止めた。

「お前はいてくれるだけでいいから、後はおれがうまくやるから、な？」

その言葉にひきづられて、武雄は部屋に残った。

確かに智和はうまく話を進めていたと思う。夜が遅いから三人で眠ろう。電気がついていると、親が起きてくる。親に幸がいることが見つかったら、幸が二人の男と寝ているところがばれたらまずい。だから電気を消そう。

電気を消すことを渋っていた幸だったが、渋っている時間のうちに隣り合う部屋の誰かが起きるそぶりを感じた。そうして電気は消され、三人は布団に潜り込んだ。

幸と智和は、間も無いちゃつきだした。正確には、智和が半ば強引に幸に体を密着させ始めた。武雄は智和を押し、その手助けをした。智和が誘惑を囁き、幸は曖昧な抗いを呟いていた。

三人は川の字を描いて寝ていたが、武雄は、智和の興奮を感じ、妙に冷めてしまった自分を思い出した。結果的に抱き合う形になった幸と智和だったが、幸から伸ばされた手に、武雄の手が掴まれたことを覚えている。体は抱擁で揺れていたが、手は暫く繋がれたままだった。冷たい幸の指先が心地よかった。が、自分がここから一刻も早く出て行かなければならないと感じられ、手を離した。

ジューズを買ってくるのを装い、自分はもう戻ってくるまいと思いい、武雄は起き上がった。

「キスした。キスした」

引き止められた武雄は、耳元でそう囁かれた。二人きりにしてやるという武雄の提案を智和は何故か蹴り、ちゃんと帰ってこいよ、と念を押すほどだった。

智和の家から、一番近い自動販売機は、二十分ほどで往復できる距離にあった。家を出た武雄は、自転車に乗ると、どういうわけか一刻も早く部屋に戻らなければという思いに駆られ、全速力でペダルを漕いだ。もし、智和に帰って来いと言われなければ、そのまま自分の家に帰るつもりだったのに、その時は理由もなく、必死にペダルを漕いだ。

武雄が智和の部屋に戻るまで、十分もかかっていたはずだ。彼は自転車を降りると、乱れた息を強引に整え、部屋に入った。幸と智和は、武雄がいない間、大した動きもなかったようだった。

夜の闇が薄まり始めた頃、智和は幸を家まで送っていった。部屋に戻ると、智和は武雄が買ってきた缶コーヒーを空け、

「お前、戻ってくるの早すぎ」  
と笑った後、

「お前は親友だよ」  
そう笑わずに告げた。

幸に電話を掛けようかどうかで迷っている智和の反応から、子供を生んだ幸が消息を絶った後の四年間、自分が彼女を独占していたの

だと、改めて武雄は実感したのだった。罪悪感はなかった。自分は、正也や智和から幸を奪ったわけではない。幸のほうから自分を選んだ。自分は選ばれたのだという自負が、彼にはあった。がしかし、その自負の成れの果てがこの現状なのかと思うと、やりきれない気持ち芽生えなくもなかった。今は単に、幸に会いたい。自分を認め、選んでくれた幸に会い、自分を支えうるだけの自負を手の内に戻したい。そう武雄は切に思うのであった。

「幸さん、今頃一体どこにいるんですかねえ？ 義人君がかわいそうじゃないんですかねえ？」

崇は名簿を見て、無遠慮に幸に電話を掛けながらそう呟いた。

「噂は結構耳にするんですよ。東京でバリバリ働いているだとか、大阪に行って結婚しただとか。この前は、福島のどっかのスキー場で似たような人を見かけたって聞きましたよ」

話している最中も、崇は電話を切ろうとしない。智和は不機嫌そうに、その噂話に聞き入っている。

「スキー場といえば、亜紀の奴、やっぱりあのボロいペンションに帰ったんですかね？」

崇は何の気なしにそういった後、切り替わった留守番電話サービースにメッセージを入れ始めた。

「良太は、ペンションのほうに電話、掛けたって言っていたか？」

智和に尋ねたが、彼は肩を上げ、首を振るだけだった。

「掛けてみた。でもあつちには行ってないみたいだ」

披露宴の進行表を作るのに必要なマジックやカッターなどの文房具を取りに行っていた良太だったが、武雄の言葉が聞こえていたようだった。

「いなくなっただって話したのか？」

「いや、この前のときのお礼ってことにしたんだ。あまり話せなかったけど、亜紀をよろしくって言われたからさ」

女主人からの依頼を、武雄は一度も果たしていなかった。自分ではなく、良太から電話がかかってきたことを、彼女はどう捉えたの

だろう。武雄は考えを巡らしながらも、良太から手渡されたマジックのキャップを抜き、ペン先に鼻を近づけ、放たれる香りを貪った。「もしかして、ちゃっかり実家に戻ってたりして？」

名簿を読み上げるのに飽きた崇は、安易にそんなことを口走った。「それはない。あいつ、実家から追い出されたんだから、戻ろうとしても撥ねつけられるのが落ちだろう」

「じゃあやっぱり……」

意見を否定され、慌てた崇は、他の男、と口を滑らす寸でのところで良太の存在を意識した。

「やっぱり、なんだ？」

「やっぱり、じきにあのペンションが、ここに戻ってくるんだらうよ。なあ？」

武雄のフォローに、崇はしぶしぶ肯いた。

智和と崇は、出欠の確認をあらかた終えると、早々に良太の家を後にした。彼らには、次の日、朝早くからの仕事が残っていた。それは良太も同じだったので、唯一暇を持て余している武雄も、気を利かせて帰ろうと、コタツを抜け出した。

「なあ、亜紀は、まだ近くに居る気がするんだ」

部屋の窓を空け、寒風に身を震わせた丁度その時、コタツに入ったままの良太が切り出した。

「亜紀は、あのペンションに行っていないけりや、他に行くところなんてどこにもないんだ」

普段正也たちといるときの良太と、自分と二人きりのときの彼は、何処か違った雰囲気があると、武雄は気付いていた。武雄にはそれがうれしくもあった。良太の態度が変化するとき、小さくはあるが選ばれたという自負が、彼の自尊心を満足させていた。

「あいつ、この部屋に初めてきた時、本当に震えて、行くところがなくて、そう言ったんだよ」

レッドウィングの紐を結び終わると、武雄は立ち上がり、振り向いた。良太は背筋を伸ばし、

「おれはあいつを探そうと思っている。探して連れ戻そうとは思っていないが、このまま行方知れずのままでは絶対いたくない」

武雄を見据えてそういった。

「手伝ってやるよ。今はおれが一番暇なんだからな」

良太の態度に満足し、武雄はドアに手を掛けた。

「お前は安心して仕事にいつて来い。この町にいるなら、きっとすぐに見つかるだろうから」

ゆっくりとドアをスライドさせながら、武雄は良太にありったけの笑顔を向けた。

## 第九話

7

樂觀している風を良太には見せたが、亜紀が本当に見つかる可能性は、極めて低いものと思われた。

失踪した女性がいる。どこにでもいる、たとえ路上に坐っていたとしても不思議に思われないような格好をした女性が亜紀だ。見つけ出すために必要な確たる手がかりは、一つとしてない。良太の勘が当たり、仮に良太や正也たちの活動範囲内に亜紀がいたとしても、一人の、取るに足らない女性を見つけ出すことは、困難に違いない。探すのを手伝うと約束した武雄だったが、彼がしたことといえば、出かけた先々で気の向いたときに辺りを見渡す程度のことだった。

亜紀の失踪を知らされた正也は、智和や良太、崇たちと共に、知り合いにその旨を伝え、網を張った。武雄たちにできることといえば、それくらいが限界であった。出来る限りのことをしたとはいえ、亜紀の消息は、その手がかりすらも掴めない状態だった。

そんな中、武雄はボンヤリと考えていた。これまでの亜紀の足取り。真治の家、ペンション、良太の家。一箇所だけ、真治の家だけに、武雄は訪れたことがなかった。きっと崇のほうからこの件については知らされているだろうと思いつながら、武雄は真治に連絡を取った。予想に反し、彼は亜紀の失踪を知らされていなかった。武雄は、真治の家まで赴くこととなった。

崇は正也の命にもかかわらず、亜紀に関する情報提供を呼びかけていなかった。

「あの野郎……」

それは真治の言葉であったが、武雄が心の中で何度も呟いた言葉と同じだった。

真治の部屋も、良太のそれと大差のないレイアウトをしていた。

コタツに入り、武雄は崇の変わりに事のあらましを話して聞かせた。  
「あいつは結局、誰にも繋ぎとめて置けない女なんですよ」

嘯いてみせる真治であったが、武雄は彼の口から、そんな言葉を聴きたいわけではなかった。

「お前の家を出て行ったときも、同じようだったのか？」

武雄の問に、真治は少し思い起こすようにし、緑のマルボロのボックスに指を突っ込んだ。

「正直、わかんないっすけど、殆ど俺のときと変わらないと思いま  
す」

期待はしていなかったが、それでも真治の答えに武雄は落胆を覚  
えた。

「でも、あいつ、ここを出て行くときは、ちゃんと出ていくって言  
つてから出て行きました。あいつ、他人に迷惑を掛けるのを一番恐  
れているんですよ」

「だから？」

「だから、良太さんに心配掛けるってわかりきっていることを好き  
好んでやったりはしないんじゃないかなって」

そういった手前、真治は自分の発言を疑うように首を傾げた。

「…わっかんないんですよね。あいつ、なんで黙って消えたりなん  
かしたんでしょう？」

そして心底残念そうに頭を掻き毟ると、

「ずっと一緒にいたって言うのに、やっぱりおれ、あいつのこと何  
ひとつわかってやれてなかったんですね」

真治はボンヤリとそう自認してみせた。

目立った収穫もないまま真治の家を後にした武雄は、まず崇に電  
話を掛けた。そして亜紀の件に協力していなかった節を正也や智和  
には黙っていることを条件に、今後の協力を取りつけた。渋々引き  
受けた体を隠さない崇であったが、武雄は構わず電話を切った。日  
が差していた。真治の住んでいる集合住宅地を囲む垣根に、まだ解  
け残った雪があった。雪は日陰に追いやられている。

武雄は着信履歴を開き、未登録の電話番号へ電話を掛けた。が、どこか恐ろしくなり、呼び出し音が鳴る前に回線を切った。もどかしくなり、彼は幸へ電話を掛けた。しかし、それはすぐに留守番電話サービスへと切り替わったのだった。

正也の結婚披露パーティーが迫っていた為、詰めの打ち合わせを兼ね、武雄たちはレストランを訪れていた。三ヶ月待たされた体で悪態をつく智和たちであったが、結果的にそれが適度な準備期間になったのに間違いはなかった。武雄の胸にも、珍しく周到なイベントになるだろうという期待を抱かせていた。

「あいつエビフライがないと暴れだすから、メニューに入れておいてやるか」

冗談半分でそういった智和は、メニューリストを指差し、

「エビフライ。衣がさくつとしてるやつ、んで、尻尾は硬くて噛み砕けないやつね」

と真顔でオーダーした。

昼時を過ぎた時間帯だけあって、客の数は疎らだった。テラス側の席では、中庭が視界に開けている。店内で目に付くものといえば、ピザを焼く石積みの大きなオープンくらいなものだ。亜紀がしきりに主張していたのは、一体どのことなのだろう。店内を見回しながら、武雄はボンヤリとそう考えていた。亜紀の消息は、絶たれたままだった。

「噂なんですけど、幸さん、こっちに戻ってきているみたいなんですよ」

打ち合わせの蚊帳の外に置かれていた崇が、悪戯に打ち明けた。

武雄は驚いて、思わず彼を窺った。智和は話を止めた。

「いや、ついこないだ、幸さんのこと見かけたって話を聞いたもんですから」

崇は少しうろたえた様子で、言い訳がましくそう告げた。

「確かなのか？」

智和は居直り、崇を見据えた。

「本当かはわからないですけど、俺のタメから聞いたんです。それ、自分は中学時代、クラブで可愛がってもらったから、幸さんのこと見間違えることなんてないって言ってましたけど」

智和はその場で携帯電話を取り出したが、取り出したまままでどこにも掛けるそぶりをせず、打ち合わせに戻った。

「確かめないのか？」

レストランを出た直後、武雄は智和にそう尋ねた。武雄は、智和がいかに確かめたくても、確かめられないことを知りながらそう訊ねていた。正也は勿論、智和や良太でさえ、幸の両親からひどく嫌われていたのである。

「悪いが、変わりに確かめてみてくれないか？」

「ああ、思い当たるところは少ないが、幸が行きそうなところもあたってみるよ」

智和の頼みを引き受ける体で、武雄は肯いた。大手を振って幸を探すことを認められたのである。僅かな満足感。それを押しつぶす焦燥。武雄は早々に良太たちと別れた。

智和は自分のできうる限りのネットワークを張り巡らせるだろう。が、正也の協力ががない場合、網の範囲はひどく狭くなる。彼は正也に協力を求めるだろうか。幸は、本当に帰ってきているのだろうか。幸に会いたい。智和に見つかった幸は、自分とのことを洗いざらい暴露するだろうか。幸にあいたい。武雄は考えを巡らし、幸の家を何度も通り過ぎた後、近くにあつたレンタルビデオ店に車を止めた。まだその店が寂れた書店だった頃、武雄は智和に、奥の駐車スペースからなら、幸の家の二階にある、彼女の部屋が辛うじて確認できることを教わっていた。恐らく、そのことを知らされたときは夏だったのだろう。その時は柿ノ木に茂った葉に邪魔されて部屋の明かりが付いているのか否か程度のことしかわからなかった。が、葉が落ちた機の隙間からは、ありありと幸の部屋だった窓が見えていた。レストランを出て、大分時間が経っていたが、部屋の明かりをつ

けるには、まだ明るすぎた。武雄は重々しく閉ざされた窓を見上げながら、携帯電話を手に持て余していた。

ビデオシヨップから中年の男性客が出てきたとき、武雄は幸に電話を掛けた。が、それはやはりすぐに留守番電話サービスに接続された。電話を切り、立て続けに幸の実家の番号を押した。呼び出し音が流れ、彼は幸の部屋の窓を見上げながらそれが途切れる瞬間を待った。彼の車からでは、幸の部屋以外、柿木と石堀に阻まれて家の中の様子は窺えなかった。彼は車から頭を出して堀の内側を覗こうとしたが、到底伺える高さではなかった。あきらめて、携帯電話を耳から外した。

重々しいカーテンは、揺らめきもせず窓を閉ざしている。武雄は、凝り固まった首を揉みながら、Aと登録した番号に電話を掛けようか掛けまいか思案した挙句、電話を助手席に放り、車のエンジンを掛けた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9008h/>

---

パラサイト

2010年10月10日13時43分発行